
【練習作】ヤムチャとキャロの魔法界転生紀行

まおー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【練習作】ヤムチャとキャラの魔法界転生紀行

【Nコード】

N9607V

【作者名】

まおー

【あらすじ】

*お報せ>IDの移転をすることを考え中です。

詳しくは活動日報で書いています。(9/23)

ヤムチャです。この度転生することになったようだ。行き先は不明だが、俺の力を必要としているらしい。まあ、俺がいなくてもあいつらなら適当に流してくれるだろう。それと転生で能力を貰えるらしいじゃないか？ 人生の主役つてのに乗っかってみるのも悪くない。もうヘタレなんて呼ばせないぜ！！
プーアルの正体がキャラ…だと。

D Bのヤムチャが、リリなののキャロとフリードが、ネギま！世界（魔法界）を旅するお話。

謎の敵に襲われて、ヤムチャは次元世界を旅立った、ところ。

【1】勧誘されたんだが？（前書き）

まあ冗談交じりの練習作だと思ってくださいあ。

【1】勧誘されたんだが？

これはヒーローの物語ではない。

常に脇役の道を歩み続けた、彼の物語である。

物語の主人公ってやつがいる。

そいつの周りには仲間がいて、ライバルがいて、恋人や家族がいる。

そして誰しもが主人公になれるわけじゃない。

いや、気がつかないでいるだけで、ひょっとしたら、みんな誰しもが主人公なのかもしれないな、自分自身の人生という主役の立場に。

そんなさやかな主役の座になくても、自分が誰かの中で主役であつたり、脇役であつたりするのかもしれないという妄想は少しばかりは許してくれてもいいだろう。

でも物語には必ず終りが来る。

それがどんな形であれ、自分が生きていたという証を残せたのなら、それは幸せな人生だったと言えるのかもしれない。

幸いなことに、俺はこれまでの人生で得たものを無駄だと思ったことはない。

どんな困難が訪れても仲間がいた。

助けて、助けられて、最後の方は足手まといになっちまったけど、やれることはやってきた。

地球が終わってしまうような戦いの中で、どんな絶望が訪れてもあいつらはそれを乗り越えて来た。

俺は傍観者という立場で、すべてを見届けてきた。

本当の最後までそれを見届けられなかったのは残念だけど、あいつらならきつとやり遂げてくれるはずだと信じたい。

ごめんな、みんな。

できることなら戻りたい。

でも可能なら、自分の人生でもっとも華やかな時間をもつ一度体験できるなら、それがどんなに無茶な願いであっても、可能ならば叶えてみたいと思わないか？

俺は死んだ。

人生何度目の死であるか、なんて忘れちゃったよ。

はは、ドラゴンボールで生き返れるだろうってか。

確かに死んで、またドラゴンボールで生き返れるって、あの世で通告を受けたんだが、俺はそれを断った。

こうしてドラゴンボールを使って生き返らせようとしてくれてるってことは、あいつらはやり遂げてくれたんだろう。

あの絶望的なほどの力を誇った魔人ブウに打ち勝ったのだ。

満足だった。

戻っても良かったんだ。

でもいい、と決めたんだ。

こう見えても、実のところは負けず嫌いな人間だ。

戦いで仲間には敵わないけど、山ほど修行を積んだ。鍛え上げた技と力がある。

それを存分に発揮できる世界がある、と教えられた。

胸が高なった。

一度は捨てた武道の道。

己の力を駆使し、強者と戦うこと。

バトルマニアじゃないが、あいつらが持ってた気概みたいなものを思い出していた。

昔は俺もがむしゃらだった。

超えたい男達がいた。

そうさ、いつだってあいつらは俺の先を走ってた。

俺は牙を捨てたけれど、狼のようにただひたすら生きてた頃があった。

その血潮を今更のように思い出す。

眼前には転生神と名乗ったおっさんがいて、綺麗なお姉さんが隣に立っている。

「どうですかね、ヤムチャさん。ぜひ我が転生課の企画に乗ってもらえませんか？」

「今なら特別サービスでどんな力も思いのままですわ！」

「はあ……」

俺は実のところどうするかはもう決めていたのだが、転生神の胡散臭さに即答するのを避けていた。

「いやあ、でも俺なんか、雑魚ですよ。この世界のあの世にだって沢山達人いるじゃないですか」

「いえいえ、ヤムチャさんだからこそ相応しいんですよ。実力、人格、ナイスガイが揃った御人は中々いません」

ふむ…いや胡散臭いが、ここで人を騙しても何のメリットもない。何せあの世では嘘付き嫌いの閻魔大王に舌を抜かれてしまう決まりだ。

広いようで狭いあの世であるから、どこにいても嘘は見破られてしまうのだ。

まあ、転生神の言ってることに嘘はないようだ。

「構わないんですけどね。詳しい契約内容はちゃんと聞かせてもらいたいね」

こう見えても仕事の契約にはうるさい男だ。

伊達にプロ野球選手をやったわけじゃない。

「もちろんですとも、うちの専属窓口でじっくり相談いたしましょう」

「閻魔大王様から許可はもらっていますわ。では、転生界に転移しますわ！」

秘書の女神というお姉さんがホイホイカプセルを投げると扉が現れ、「転生界行き」という札がかかった扉が現れる。

「さっ！ 行きましようね。入ったら道沿いにまっすぐですから」

と、ヤムチャの背中を二人が押して、ヤムチャは開いた扉の向こうに押し出された。

振り返ると扉は消えていて、転生神と女神の姿も見えない。

俺は乳白色の雲が足元を流れていくのを見送った。

階段が現れ、その先に朱塗りの門に豪勢な建物が見えた。
あれがきつとそうなのだろう。

「えらく強引だな、何か裏でもあるのか？」

何となく引つかかるものを感じたが、ヤムチャは建物めがけて走りだした。

【1】勧誘されたんだが？（後書き）

相棒のプーアルは女の子でいいよね

何となくプーアルの設定が決まったのでアンケートは取り下げよう

【2】ヤムチャ、転生について学ぶ（前書き）

間話的な話

【2】ヤムチャ、転生について学ぶ

——転生局

「はい、こちらが簡単な身上書類となっております。転生者様の簡単なプロフィール、希望する世界、転生方法、希望する能力を書き込んでください」

「あ、どうも」

俺は出されたお茶をすすりながらその書類の束を受け取る。
手元にずしりとその束がのしかかる。

「この分厚いのは……」

「転生先候補の一欄となっております。転生可能な世界はおよそ三億ほど、年間五百万人ほどの転生者様がここに訪れます。年々数は増えていきますけどね」

「え？ 多いですね…そんなに世界があるんですか」

「ええ、まあそうですね。最近の方だと比較的近年の著作物に転生先が決まるので、世界は多くても選択肢は限られてたりしますね」

「はあ……」

「身上書類の方は最低必須事項をお埋めくださるようお願いします」

「*のマークのところでね」

と、俺は赤くアスタリスクのついた項目を見る。

その書類はまるで履歴書そのものだが、学歴を書く項目は存在しない。

昔、悟空のやつに仕事を世話しろとチチさんに言われて履歴書書かせたっけな、と思い出す。

色々と悟空のやつが常識外れのせいで揉めたんだよなあ：俺が全部後始末したけど。

用紙には特殊能力希望欄に基本能力希望欄とか、趣味程度に欲しい能力はなんですか？とか、そんな部分が割合を占めていて、普通の履歴書とはまるで違うのが特徴だ。

「書き終わりましたら受付にお渡しください。神様との面談の後、問題なければ能力の受け渡しと、行く世界の選別などを絞ることになります。ではよりよい転生ライフをお楽しみください」

と言って、事務のお姉さんは事務課の棟に消えていく。

俺の周囲には同じように書類とにらめっこする転生者とおぼしき少年から老人まで様々だ。

やれやれ、と、世界リストをめくるが、わからんと俺はすぐにそれを放り出した。

リストには様々な世界の名前と注釈らしきものが付いているが、まったく理解できない。

そもそも転生先が決まっているものと思ったからだ。

視線をテーブルの向こうに飛ばすと、ヤムチャに渡された同じ書類を持ってにらめっこする人達が椅子に腰掛けている。

参考に話でも聞いてみるか。

席を立ち、こっそりと近づいて、後ろから覗き込む。

その青年は屈み込んで懸命に文字を用紙に書き込んでいた。

すでに希望能力の欄は真っ黒で、書き込んだ文字は飛び出して、

書類の裏にまで書きこまれている。

凄いな…参考になるかもしれないな。

「あの、すいません」

「……ここで僕が飛び出して介入、なのはちゃんとフェイトちゃん
の間に割り込んで…ブツブツ」

聞こえていないのか、青年は呟きながら額の汗をぬぐい、太り気
味の巨漢を震わせた。

異様な雰囲気ではあるが危険は感じない。

「すいません？」

「え、なんだよ。うるせえな」

青年は頬を揺らして振り返る。

そのさまはブルドックにも似ていたが、俺は口元に浮かべたポ
カーフェイスを崩さない。

対人耐性は昔に比べたら随分上がったもんだ。

「ああ、悪い悪い。君つてもしかして転生者かい？ 俺ちよつとこ
こに来たばかりで勝手がわからないんだよね」

「僕もさつき来たばかりだよ。おっさん、考えてる最中なんだ、邪
魔しないでくれよ」

「まあ、そう言わずにおじさんにも少し教えてくれよ。さつきから
見てたけど、君の書きこむ情熱が凄くてさ。随分としっかりしてる
なって思ってたんだよ」

「ああ、これ？ そりゃ、転生できるんだし、せつかくだから俺最
強で決めたいじゃんよ」

「それが能力ってやつだね。参考に見せてもらっていいかい？」
「いやダメだって、最初から手の内晒すのは雑魚の証拠だぜ。とっておきの能力は最後の最後まで使わないのが常識だぜ」

と、青年は書類を伏せてしまう。

「あー…いやあ、そうだね。とっておきの能力か、君の言うこと…理あるなあ。そうそう、転生先は決めてあるのかい？」

「あん？ まあね、リリなの世界にいくつもりさ」

「リリなの？」

「おっさん、リリなの知らないのかよ」

「悪い、知らないなあ。どんな世界だい？」

そして青年は語り始めた。

それは魔法少女の物語だった。

俺には馴染みの薄い創作物の世界だが、青年の様子から、彼にとつてはそれこそが彼自身の世界なのだろうことを思わせた。

それについて俺が言うことは何一つない。

どんな世界に生きるかは人それぞれだ。

誰かが拠り所にする世界を否定する意志はなかった。

「…でよ、そこに俺が原作介入すんのよ。なのはちゃんとフェイトちゃんは俺の嫁ってわけよ、フヒヒ」

鼻息荒く笑う青年は汗を吹きながら用紙になにか書き込んでいる。どうやら設定を一つ書き加えたようだ。

いや…話的に九歳か十歳の子どもに嫁とか言うのは犯罪なのでは？
少し自信が揺らいでくる。
本当にいいんだろうか？

「向こうじゃ俺、TSするつもりだぜ。美少女、月村すずか憑依で俺様ハーレムを作ってみせる」

「TSってなんだい？」

「おっさん、TSも知らないで転生するつもりなのかよ。転生なめんな！」

ドン！　　とテーブルを叩いて青年が説教モードに入る。

まあ聞くか、知らないでいるより知ってた方が話は進めやすい。

こういつの、ベジータと悟空だったら聞かないで帰ってるだろうけどな。

まあ、ベジータの場合、ぶっ飛ばしそうでもある。

TSというのは性別転換であると理解できた。

今一利点はわからないが、そういうことも転生の醍醐味なのだろう。

ようやく話が終わり、俺は青年に礼を言ってそこを離れた。

【2】ヤムチャ、転生について学ぶ（後書き）

次回、美少女プーアル登場。

【3】プーアルの正体！？ 私、キャラです！！（前書き）

はじめに言うておく。
やだ、何この展開。

【3】プーアルの正体！？ 私、キャラです！！

元いた席に戻ると、俺を勧誘した転生神と女神がちゃっかりと席に座っていて、見知らぬピンク髪の少女もいた。

俺はとりあえず神様に挨拶することにした。

「あれ、勧誘に来た神様ですよ？」

「どうもヤムチャさん、向こうでの手続きを終えてから帰ってきたので」

「そうですか、何だか不慣れでわけがわかりません」

「いやいや、ヤムチャさんは人生経験が豊富ですね。神慣れしてるっしょ」

そりゃ、地球で神様から稽古つけてもらったり、界王星で界王様から修行を積んだりもしたしな。

地球外の人なんてのもいたわけで、慣れてるって言ったら変だけど、そこら辺の耐性は十分にある。

ふとピンク髪の少女が立って、俺の足に抱きついてきた。

お、おい？

「ヤムチャさま」

固まる俺、だ、誰だ！？

「あー、ヤムチャさん。よくご存知の人物です。ヤムチャさんが転生すると知ってですね……」

「ヤムチャさま、ひどいです！ わたしを置いてくなんて。嫌いになっちゃったんですか？」

十歳ほどのピンク髪の少女が瞳をうるませて、大粒の涙が零れ落ちる。

傍から見て、どうみても俺が悪い人だな。

こんなふうにはスキんシップを取ってくるのは一人くらい、いや人ではないが…あいつくらいだろう。

「え……あ？　もしかしてプーアルか？」

「はい！　そうですう」

ギューツと腰元を抱きしめたまま少女、いやプーアルが答えた。
どう見ても愛らしい幼女、いや少女だろうか。

「何で人に化けてるんだ？」

「化けてないです」

「はいー？」

そこで転生神が立ち上がった。ヤムチャの前に立った。

「それについては話が長くなりますねえ。まず彼女…プーアルさんですが、実はヤムチャさんの世界の人ではないんです。簡潔に言いますと次元漂流者でして、転生の手続きなしで流れ着いた来訪者というところですか。そこではあなたがよく知る、プーアルという生き物に変身させられていたんですよ。そのせいで彼女は元の体にも元の世界にも帰れないまま、次元漂流者として生きなければならなかった。あなたがよく知るプーアルさんは、呪いによって姿を変えられた彼女だったわけですよ」

「そ、そうなのか？」

「はい、そうなんですう」

「知らなかった…長い付き合いなんだが」

改めて俺はプーアルだという少女を見ていた。
ピンク髪のまだ幼い少女だった。

まだ、彼女がプーアルであることを信じられないでいる。

「そこはヤムチャさん、彼女にも事情があつたんですよ」
「事情？」

「はい、プーアルの姿にされた時、前の世界の記憶を奪われていた
ようでした。呪いが解けて、ようやく本来の記憶を取り戻したん
ですよ」

「な…しかし、どうやって呪いが解けたんですか？」

「えと、魔人ブウです」

プーアルが答える。

魔人ブウだって？

「魔人ブウに殺されて、わたしの呪いが消えて、元の姿に戻って、
記憶も戻ったんです」

「なんてこった……殺されてようやく自分が誰であるのかわかるな
んて、どんな皮肉なんだ」

俺がプーアルの柔らかい髪を撫でると、嬉しそうに頭を指になす
りつけてくる。

こういう仕草はプーアルそのものだった。
もう違和感はなかった。

「それとわたし、本当の名前も思い出したんです」
「本当の…プーアルの名前か。ずっとプーアルだったから不思議だ
な」

「えっと…わたしも実はすごいいくしぶりなんですけど。名前変わるの嫌ですか、ヤムチャさま？」

遠慮するようなプーアルの視線を捉える。

こんな小さな子だと思わなかったが、プーアルはプーアルなんだ。不安がらせるのは俺の流儀じゃない。

くしゃくしゃとその頭を撫で回す。

「いやー、別に俺は名前にこだわらないけどさ。それがプーアルにとって大事な名前なら、その名前で呼ぶし覚えるよ」

「はい！ ヤムチャさま、だいいきーすき！！」

また抱きついてくるプーアル。

「あの…名前なんですけど」

「うん？」

耳元で少女が囁く。

「私の名前、キャロ・ル・ルシエって言います」

【4】え？ 竜！？ フリードと出会う（前書き）

全然間話。

「4」え？ 竜！？ フリードと出会う

衝撃的なプーアルの真実の正体を明かされた後、俺とキャラは隣り合って座っていた。

キャラの身を包む、白いどこかの民族衣装の縁には模様があり、オシャレのアクセントとなっていた。

ピンク色の髪は柔らかみを帯びて横顔にかかり、あどけない印象を伝えてくる。

本当に小さな女の子なんだな。

いや十歳だと言ったっけな。

もし娘がいたらこんな感じだろうか？

ブルマなんかとは正反対だから、ちよつと印象が違うよな。

結婚か、家庭を持ってたらどうなったんだろうな？

戸惑いはもうないのだが、女の子として扱うべきなんだろうな、と漠然と考えていた。

プーアルに性別はなかったしな。

転生神と女神は、またあとで会いましょうと昼の休憩に行ってしまった。

何というか、神様もお役所商売なんだなと、俺は二人がくれた「転生バーガー」を片手にかじっている。

キャラはそれを両手で持って可愛らしく食べていた。

「美味いか、プー：キャラ」

「はい、ヤムチャさま」

「一応、ここもあの世扱いなんだな。天国と地獄の狭間って言うだけだ」

「そふ、みたいですネ」

最後の一口を頬張って、ほっぺを膨らませたキャラが答える。
ごくり、とキャラは飲み込むが喉を詰まらせる。
軽く咳き込むのを、ヤムチャがその背を軽くさすってやるとすぐに落ち着いた。

「その服はどうしたんだ。変わってるが？」

「女神様がくれました。私の記憶から、再生して作ってくれたみたいです。ル・ルシエの部族の衣装なんです」

「ル・ルシエか、キャラのいた世界を覚えてくれないか？」

「はい、でも私、小さい頃に部族から追放されて、ずっと、何年か荒野をさ迷ってた記憶しか有りませんけど」

「え？　ずっと一人で…追放って何があっただんだ……」

こんな少女を、いやもつと小さかった幼子を追放するなんて普通ではない。

「あはは、実はですね」

『転生ナンバー「えの515-497-90495」のお客様、三番受付までお越しください……』

館内放送が呼び出しでその番号を告げる。

その番号はヤムチャが受付で資料をもらう際、受付嬢から渡された小さなプレートに刻まれた数字だった。

「あれ、何だろうな。キャラも行くか？」

「はい」

「よし、じゃあこれキャラの荷物だよな。持ってやるよ」

「あ、それは…」

俺はキャラの足元の大きなバッグに手を伸ばしていた。

「ん？」

と、掴もうとした瞬間、バッグがもぞもぞと動いて、ジッパーを突き抜けて白い首がそこから突き出て顔を覗かせていた。そこにいたのは小さな白い竜だった。

「い！？」

「あ、フリード。大人しくしてなさいって言ったのに」

「フ、フリード？」

「ごめんなさいヤムチャさま、この子、フリードって言います」

バッグから飛び出たフリードをキャラが抱えて申し訳なさそうに見ている。

そのフリードはキャラの腕の中でもぞもぞと体を動かしている。

「そうか、フリードっていうのか。いい名前だな」

ちょっと吃驚したが、キャラになついてる様子から危険はないと判断して、フリードの頭に手を伸ばして撫でた。

軽く鳴いて、俺の手を舐めるフリード。

よく見ると愛嬌のある顔をしたやつじゃないか。

「はは、お互い挨拶済みだな。キャラの竜なのか？」

「はい、私の相棒なんです」

「そうか、いつからなんだ？」

「えと、色いろあるんですけど……」

「ま、それは後で聞こう。受付で呼んでるしな」
「はい」

俺は軽くなったバッグを持って、フリードを抱えたキャロと一緒に受付まで歩いた。

ちなみに俺が渡された書類と資料はあの二人が持って行ってしまった。

直接話して決めましようとのことだ。

そこらへんは融通が利くんだなと感心する。

どの世界のお役所もきつちり型にはまった仕事しかないんだがな、と考えながら、俺は受付に自分のプレートを差し出した。

何だか恐縮してる受付嬢さんの案内で奥の部屋に通されて、俺は少しばかりあの二人の立場を見誤ってたことを知る。

え？ 転生界の最高神だつて？

人が悪いよなあ……と、俺は目の前で微笑む二人を眺めていた。

【4】え？ 竜！？ フリードと出会う（後書き）

次回はヤムチャの能力強化か転生の話になります。

一度の更新量が少ないので展開遅いですが、練習作ですので。

【5】チート能力貰うぜ（前書き）

自らに望みがあることの再確認。

【5】チート能力貰うぜ

ヤムチャとキャラを前に転生神が腰掛けていて、向かい合う形で二人がソファに座っていた。

キャラは話の内容にあまり興味はないのか、お茶請けの菓子をテーブルに並べて選んでいて、ヤムチャの茶請けの前に綺麗な包装紙に包まれた菓子を並べていく遊びをしていた。

「さて、ヤムチャさん。あの世で一度説明しましたが、転生時における転生者への能力付与はこちら側の最低限の義務となっています」
「ああ、パンフレットにも書いてありますね。最低でも一つは力を持たないと転生できないって」

「ええ、何せ転生者の多くは元々何の力も持たない人が大半です。保険も何もなしに放り出すのはルール違反でして、余程の例外がない限りそういうことは起きません」

その言葉が少し引つかる。

例外ってなんだ？

その意味を俺は考える。

「何でも好きな力を手にできるのに、それを蹴る人もいるわけですね？　そして例外も認めている。でもそれはおかしいですよ。転生するためのルールから外れてます。えっと、疑問には答えていただけますよね？」

「はは…そう、例外といいましたが、我々転生局は転生者に対して無理強いを強いることは元則できません。そして転生者の望み。特に無欲の要望を退けるのは服務規程違反に当たります。つまり何の力も望まないということが、転生者が我々に突きつけることができる最大の要求ということになります。まさに切り札ですね。この

選択がされると、我々転生神は転生者が転生した世界に干渉することが実質不可能になります」

「それを望む人がいるんですか？」

「例外として過去に何人か存在しますよ。つい最近もね、いましたよ。十一才の女の子がね。実に気丈でした。転生課史上最年少でしたしね。記録にも残っていますよ。生まれ変わりだけが望みでした」

「は、はあ……すごいですね。って、そんなこと漏らして平気なんですか？」

「はは、そうですね。我らの間での禁則事項。つまりあえて言わないで済まず、というわけです。そしてここは転生局。転生者の望み通りの力を与える場所です。ここに来る方達は少なからず望むものがあります。どんな勇者や悪者でも叶えたいものがあります。そして新たな力を望まず、生まれ変わりだけを望むことだって可能なわけです。ただ生まれ変わるだけなら天国に送るのが決まりですが、以前の記憶やらを持ったままの生まれ変わりでしたから、こちら側の裁量権も多少使うことができました。ただ我々も転生職ですから、できるだけ多くの望みを叶えることが実績に繋がりますねえ。先ほどの少女の担当者ですが、酷く落ち込んでしまっていましたねえ。まあ、彼も若いからすぐ復帰すると思いますけど」

と、一息ついて転生神がお茶をすすする。

そいや、この人ここの責任なんだっけな。

転生者の権利か…何も望まないことが最大の要求だなんて、ここに来た時点で何も望まないで要られるというのは余程の決意が必要なはずだ。

何せ何でも望むものを与えてくれるのだ。

それこそ神になったような新しい人生が約束されるにも関わらずにもだ。

わからないな、いや理解する必要はない。

その少女にとって最も強い望みが何も望まないということだった、
というだけのことだ。

「そんなこと話して、もし俺が何も望まなかったらどうするんです
？」

「それはそれで一つの選択というわけです。ヤムチャさんは望んで
ここに来られた。我らは可能な限りあなたが望む何かを叶えるのが
仕事です」

あなた達に説得されてですけどね、と俺は付け加えるが、顔には
出さない。

ちよつとばかりの甘い言葉と、やり直しのきく人生を目の前にぶ
ら下げられて、心傾かない人間はいるだろうか？

いるな……ごく身近にいた。

悟空なら気にすら止めないかも知れない。

だけど俺は違う。

望むものはあった。

「俺には望むものがある。ここにきて、また一つ増えた。だから遠
慮しませんよ。な、キャロ」

「はえ？」

ポンと頭に手を置かれキャロがヤムチャを見上げる。

馬鹿、お前のことだよ、と心の中で付け加える。

「キャロは俺の相棒だからな」

と、片目をつむってみせる。

「はい、ヤムチャさま？」

不思議そうにキャラが小首を傾げる。
足元のフリードがお菓子をせびって、キャラの手元からお菓子を
さらった。

「フリード！ めーだよ」

そうだ、俺はこいつを守らなくちゃいけない。
だから生半可な力のままではいたくない。
チートでもいいじゃないか、と思う。
俺が相手にしてきたのは、そんな連中ばかりだったしな。

「俺が望む力は……」

【5】チート能力貰うぜ（後書き）

ちなみに作者が書いてる「ナノハでいくの」の高町なのはが訪れた
転生界とちよっぴりクロスしてます。

関連はしません。

次回は能力要望。

続けて書きます。

【6】一番めの能力!!（前書き）

まず欠点の克服から。

【6】一番めの能力！！

最初に俺が考えたのは欠点の補足だった。
俺達地球人にはちよつとした弱点がある。

サイヤ人である悟空やベジータ達。

ナメック星人であるピッコロ。

そして実は宇宙人の末裔らしい天津飯。

彼らとの間にある差、それは基礎的な戦闘力を除いた、気の扱いにおけるコストパフォーマンスの違いがあつた。

地球人が気を扱えるようになるには凄まじい鍛錬が必要だ。

しかし彼らサイヤ人は、悟空の小さい頃を除いてだが、悟空やベジータの子ども達は、ごく幼い頃から気の扱いを無意識の内に使いこなしてしまつたりする。

天下一武道会でスーパーサイヤ人になつたりとかな……

とにかく気弾一つとっても違うのだ。

一度に放出できる気の回路が俺達地球人に10あるとしたら、彼らは100の回路を持っていると思つてくれていい。

単純に十倍だ。

それが直接的な戦闘力に繋がるわけじゃないが、一気に気を爆発させたとき、10の回路しかない俺達と彼らでは出力が違いすぎる。10秒かかつて最大に気を高められるところを、彼らは一瞬で行えると仮定してみると、戦いの中でのその差は決定的な差にもなりうる。

変動的なエネルギーの生成において、サイヤ人の爆発的な瞬発力に敵うものはいない。

それはもう技術とか戦闘力とは別の次元だ。
それが地球人と彼らとの徹底的な差となっている。

その違いを、例えば天津飯の使う気功砲を上げてみよう。

あの技は地球人が使いこなすには恐ろしく難しい技になっている。
最大限に高めた気を一極範囲に撃ち出す砲撃は、地球人が連発して使えば死に至る可能性がある。

しかしそれを天津飯は連続して放ってみせたのだ。

あの圧倒的なセルを足止めすることさえしてのけたが、そのせいであいつは命を落としてしまった。

地球人の代表は、俺とクリリン、それに武天老師様だ。

武天老師様はまごう事無き気の達人で、その力の扱いは今でも武天老師様の方が一枚も二枚も上手である。

純粋なパワーだけならば圧倒的に勝利することもできるが、もし同じ実力で挑んだならば決して勝つことはできない。

気の扱いにおいては最強の地球人の一人でもある。
教えを乞うにはもう遠い人になってしまったけど。

クリリンは努力肌で、地球人の気の扱いにおける欠点を工夫を持って改良した男だ。

中でも特筆すべきは気円斬である。

放出系の技でありながら、極点集中に寄って生まれた気の刃を自由自在に飛ばし操作する。

なおかつ飛ばしながら威力を損なわない恐ろしい技である。

一度その秘訣を聞いたのだが、クリリンには大笑いされてしまった。

だってあれ、お前の繰気弾からヒントを得て作ったんだぞ？

繰気弾、その名が出たとき、まさに目からウロコが落ちた。
放出系は向かないと思い、一度は実戦で使うことを断念した技。
気の操作に気を取られることの多い繰気弾は当時の俺には精一杯
の大技だった。

神様^{シエン}に技を破られて、俺はその技を封印した。

かめはめ波が直線に対し、繰気弾は変幻自在だが威力は低く、攻
めの決定打には成り得なかったのだ。

加えて出力の安定にも気の力を取られたが、もし出力という欠点
を抑えることができればどうだろうか？

だがそれ以上の答えを俺は引き出すことができなかった。

あの時は人造人間が攻めてきてそれどころではなかった。

そして、あの後、俺は武道の道を捨ててしまったのだから。

だからこそクリリンの凄さがわかる。

あいつは地球人の欠点を克服したのだ。

その壁を俺は越えることができなかったのだ。

「気をもっと上手く扱えるようになりたい。地球人の欠点は気の出
力の低さだ。そうだな、悟空とまでは言わないが、天津飯くらいに
は出力を上げたい、できますか？」

と、俺は銀縁眼鏡をかけた転生神に告げていた。
彼はヤムチャを見返して目を細めた。

「気がついていましたか、彼らとあなた方地球人との差」

「そりゃあね、何十年と修行した仲です。あいつらがとんでもないパワーを持ってた理由を俺なりに解釈しただけです」

「いいでしょう。簡単に説明すると、あなたの気の通り道をバルブだと思ってください。それを少し開放します。通り道が大きくなるわけですから、最初はちよつと大変かもしれませんが、まあ、あなたならすぐ慣れるでしょう」

「なるほど……」

「それではヤムチャさんの要望を【受理】します」

机の上においた書類に転生神が判子を押すと、ヤムチャの体に気が満ちて、爆風を巻き起こした。

「ぶつはあつ！ な、何だこれ」

「ひゃ〜」

「キャウ〜」

キヤロとフリードが座席から吹き飛ばされて床を転がり、転生神も書類を押さえるのに必死だった。

「気を抑えてくださいヤムチャさん！」

「ちよつ、何だか力が沸き上がってくるんだが!？」

「お願いしますよお！」

「く、こうか……」

まるでちよつと気合を入れたほどの気の奔流だ。
まさに暴風である。

その中心で指を組んで精神を集中して抑えこむ。

気穴と呼ぶその穴を徐々に閉じていく。

その密度は濃く重かった。

これほどの気の力を自分が持っているということがまだ信じられなかった。

今なら、悟空と同じくらいの密度のかめはめ波を撃てる気がした。

「ふう……収まった」

「いや、驚きました。これほどとはね……さすがはヤムチャさんです」

「え？ いや、すみません」

「いえいえ」

「ヤムチャさま」

と、キャロが起き上がって抱きついてくる。

フリードも無事なようだ。

「悪い悪い、突然で驚いたな」

「はい！ やっぱりヤムチャさまはすごい人です。地球人で一番強い人です」

「はは……まあクリリンもいるけどな」

「それでも、ヤムチャさまが一番なんです」

少し頬を膨らませてキャロが拗ねたように言う。

「これが一つ目の力……」

「ええ、【地球人の気の扱いにおける上限の突破】です。今のあなたの戦闘力そのものは変わりませんが、気操作に関しては約十倍、サイヤ人に匹敵する能力を持っています」

転生神は落ちた銀縁眼鏡を拾って埃を拭い、椅子にかけ直すと余

裕の笑みを浮かべる。

先程までの慌てた様子はどこにもなかった。

「さあ、次の願いに移りましょう」

銀縁眼鏡が光り、笑みをたたえた顔で彼が告げる。

【6】一番めの能力！！（後書き）

超地味な一つ目でした。

補足：

潜在的な気の力は変化はしていない。

一度に放出できる気の容量がとんでもUP。

エネルギー弾がめっちゃ得意になりました。

練気弾に陽の目が当たる日がキター！。

慣れないので使い方を誤るとガス欠になる。

【7】二番めの能力は超能力！？（前書き）

懲りずに書くのであるな。

【7】二番めの能力は超能力！？

「じゃあ、超能力なんてどうかな？」

俺は神様にもう一つの能力を提示する。

「超能力ですか、意外な方向性ですね。何故ですか？」

「まあね、ほら悟空が使ってた瞬間移動とか、テレパシーもあったな、あれを使いたいんですけど」

「いいですよ、孫悟空の持っていた超能力の付与を【受理】します」

神様は次の書類に判子を押す。

今度は何か起きるのかと身構えていたが、特に目立った変化も見られなかった。

「あっさりですね」

「ええ、まあね。お試しになりますか？」

「そうだな…」

と、俺はフリードに試すことにした。

どうやるのかわからないが、フリードを意識して呼びかけることにした。

『おい、フリード』

『！？ ダレ』

『俺だ俺、ヤムチャだ。お前喋れるのか』

『シャベレナイ、コトバワカル』

フリードが俺を見て一声鳴いた。

キヤロが不思議そうに俺とフリードを見る。

「どうしたの？ フリード」

「今、フリードと話したんだよ。こいつ話してることはわかってるんだな」

「フリードは、賢いんです！」

「そうだな、テレパシーはこんなもんか、有効距離とかどうなってるんだろうな？」

俺は神様に向き直って聞いてみた。

「孫悟空さんは気を探知できて、その相手のことを知っていれば、どこにいてもテレパシーを届かせていましたから、ヤムチャさんなら地球範囲ならどこでもカバーできると思いますよ？」

「え！？ そんなに……結構強いんだな」

「気の探知の併用ですね。感覚の延長線上がテレパシーですから、気を探れる限界までが有効範囲です」

「そりや便利だな、どこにいてもか、はぐれても問題なさそうだが瞬間移動も似たようなものですが、超能力は気を消費するんじゃないって精神力を消費するんです。ここらへんは鍛えるのは難しいですからね。精神力が枯渇すれば当然使えません」

「精神力か……ぶっちゃけ、俺の精神力だときつそうだな」

俺はハングリーさでは仲間内で一番のドベだったと言っていい。恥ずかしい話だが、人間楽に流れる主義だし、そうやって生きてきた。

ベジータや悟空みたいに戦いだけに集中しろとか言われても無理だ。

天津飯みたいなストイックに生きるのも主義に合わない。

結局のところ、一番近いのが武天老師様とかヤジロベー、クリリ

ン達だったな。

「謙遜ですな。そこらの転生者の方より、ヤムチャさんの方が強靱な精神力を持っていますよ」

「むちゃくちゃな連中がいましたからね。俺はついて行けなくて挫折した。なくしたものはハングリーです。戦いの技を磨く以前に、俺は俺に負けていた気がする。神様でも人の心なんていじれないだろ？」

「そうですね。強いからと言って心が本当に強いとは限りません」
「まあそれはいいとして、瞬間移動ってどうすりゃいいんだ？ 試しますね」

最近行った場所をイメージしてみる。

うーん、いまいち掴めないな。

あ、閻魔大王のところに飛んでみるか、一応世話になったし。
気で閻魔大王の位置を探る。

驚いたことに一瞬で特定することができた。

気の力の捜査の向上は以前の何倍も高まっていた。
なるほど、気を使った戦いで悟空が遅れをとることがなかった理由が掴めたような気がした。

やっぱりお前は宇宙最強の男だよ。

「じゃ、ちよつと行ってくる」

ヤムチャが意識を感知した場所、閻魔大王の執務室に飛ばすと、忙しく歩き回っている子鬼に指示を下す閻魔大王が見える。

その場に移動した自分のイメージを投影すると、精神が溶けこむように引きずられ、次の瞬間には俺は閻魔大王の目の前にいた。

「き、消えました！ ヤムチャさま？」

キヤロが部屋のあちこちを走りまわって、どこかに隠れているのではないかと覗き込む。

「ちゃんと使いこなせたみたいですね。さすがは天才といったところでしょうか。あらゆる方面での才能に彼は秀でている。前の世界では目立つことはありませんでしたが…」

転生神は銀縁眼鏡のフレームの歪みを直しながら独り言をつぶやく。

気を探る能力そのものが恐ろしいチートですね。
やはりあの世界の戦士は桁が違う。

「ただいま」

消えたときと同じように、部屋の中央にヤムチャが姿を現すと、その背中にキヤロが飛び乗った。

「ヤムチャさま見つけたー」

「おい、重いぞ。ファッハハッハ」

キヤロを降ろしてソファに、あーあ疲れたと腰を下ろす。

「どうでしたか？」

「閻魔大王にあってきたよ。一応世話になったしさ。それより瞬間移動は結構疲れるな」

「何せ物質を移動させますからね。テレパシーの十倍は消費するんじゃないでしょうか」

「そうか、やっぱりな。距離も関係あるみたいだし、そうそう使えるもんじゃない。短距離なら問題なさそうだけど」

「初めてだというのにあつという間に使いこなしましたね。何か秘訣が？」

「ああ、いや、悟空から何となく使い方は聞いてたんですよ」

やはり天才ですな、と転生神はつぶやく。

「そうだ。三番目の願いなんですけど……」

ヤムチャの言葉に転生神は姿勢を正した。

【7】二番めの能力は超能力！？（後書き）

D B世界の住人なので、あっち世界の人間思考でのチートを考えてら、超能力が妥当かなと思った。

【8】三番めの能力で次元旅行するぞ！（前書き）

勢いでなんか書いた。

【8】三番めの能力で次元旅行するぞ！

確かパンフレットの心得にはこう書いてあった。

転生者は選択した世界に望んだ形で転生を果たし、新たな生を得るまでその世界に存続し続けること、という一項目があった。

これはつまり、転生者は基本的に他の転生世界に移動することを転生時に望まない限り、どのような力を持っていても移動することを禁じているということだ。

転生局の理念に照らし合わせるとしつくり来ること、あえてそれを望まなければ他の転生世界に行くことはできず、転生した世界に縛り付けられるということだった。

一つの世界に存在する転生者は原則一人、というのが転生局の基本方針だ。

もし転生先の世界で転生局の介入以外の手段で他世界への移動手段を見つけ、それを利用して他世界に転生したとしよう。

存在しないはずの不法転生者の存在は、その世界を変容させてしまふ可能性がある。

通常の転生者はその世界に自然に生まれ落ちたものとして世界に認識されるが、もし次元侵害を侵して世界に侵入した場合、その存在は世界に混乱をもたらすのだ。

そして転生局はその顔が持つもう一つの側面を見せることになる。まず、転生神は不法侵入した転生者を裁く立場を得、不法転生者は次元侵害者として転生局から追われる立場となる、というものだった。

転生局が持つ裏の顔というわけだ。

そして不法転生者が強い力を持つほど、転生神は強い力を執行して、不法転生者を捕縛する権限を得るのだという。

その説明を俺は目の前にいる神様から聞いていた。

当然ながら、その説明は転生者が説明を求めない限り説明されることもない禁則事項の中身である。

転生局って、組織としてかなりやばくないか？ と俺はかなりむずむずするものを感じていた。

話が長いので、俺の膝に頭をもたらせてキヤロが寝ていた。

フリードは絨毯の上で寝そべっている。

「……ここまでが次元侵入における我々の立場と権限です。不法転生者は強いがゆえに次元世界の扉を開く手段を得ることがままあります。もしそうなった場合、次元世界のバランスが崩れ、下手をするといくつかの次元世界が壊れてしまいかも知れません」

「それって、相当やばいってことじゃないですか？ 防ぐ手立てはないんですか」

銀縁眼鏡を光らせて、転生神は顔の前で指を交差させて組んだ。

光の加減でか、メガネの下は見えない。

何だか神様の方が悪役に見えるなあ、と俺は少しくすりと笑う。

「残念ながら、事前に防ぐ手立てはありません、何せ強制介入が許されるのは次元侵入が発覚した後が基本です。事件はいつだって起こった後ですから。そして後始末の仕事を回されるんですよ、はあ……」

深くため息を吐いた神様にちよつとだけ同情をするが、あえて素知らぬ顔をする。

中間管理者ってのはいつでも辛いんだな、と俺は神様に心から同情していた。

「神様は言いましたよね？ 転生者が望めばあなた方は決して逆らえないと。もし次元侵入してもそれが転生者の望みならどうなんで

すか？」

「ふむ、左様、確かにその通りですが、ヤムチャさんは前提を無視して話をしましたね？」

「ええ、願いの範疇でない望み、といったところですか」

「そう、その手の行動は、実は転生者にはよく見られる傾向なんです。強い力が一つの世界にあり続けるには世界が狭すぎる、というのがもつとも多い動機ですね。彼らは自らの望みが世界の選択だと信じて疑わないのです。その行動でいくつもの世界を危険に晒すことが理解出来ない」

「強い力を持つほどか……わからないでもないな。別宇宙からフリーザが攻めてきた時、もう終わりかと思ったものだが。あれ？」

「なんでしょう、ヤムチャさん？」

ヤムチャが首を傾げると、転生神が視線でその動きを追う。

「過去からトランク스가来た時、あっちの世界は俺がいた世界と並行する世界だったはずだ。つまりは全く違う世界で、あなた方が管轄する転生局の法に抵触しなかったんですか？」

「ああ、あれですか。問題ありませんでしたよ。彼にはあなた達がいた世界に飛ぶ時、転生局が干渉して処置の許可を与えましたから」

「え？ トランク스가転生局と接触してたんですか？ それに処置って……」

「フリーザ親子を処理する許可です。彼らは不法転生者だったんですよ」

「な、なんだってー」

衝撃的すぎる事実だった。

あのとんでもない強さを持った親子が転生者だったなんて。それにトランクスの奴、一言もそんなこと言わなかったし。

「いや、お恥ずかしながら、我々では手が負えなくてですね。それと、フリーザはあなた方の世界の存在だと言えますが、コルド大王が不法転生者です。自らの分身と言えるフリーザを生み出して、文字通り宇宙を支配していました。いや、転生局でも有数の大犯罪者でしたねえ。トランクスさんのおかげで何とかりましたが」

「ちよつとだけショックですが……」

「すいませんねえ、トランクス君には守秘義務というやつで黙ってもらいましたから。それに悟空さんが到着する前にかたがつかなければ、あの世界は溜まり溜まった歪みに押しつぶされて、世界が終わってたかもしれません。いや、危ないところだったんですよ。あつははは、どうしました？」

うなだれたヤムチャに転生神は浮かれた声をかける。

「……あー、いえ、どうもいませんよ。それじゃドラゴンボールがあつても無理ですね」

「そうですね。次元介入者の協力がなければ我々では解決できないことも多々あります。彼らに別次元での行動の権利を与えるのも転生神の裁量権の一つなんですよ」

「大体話は理解できました。でも、じゃあ難しいのかな」

「何がです？」

「俺とキヤロで次元世界をあちこち回ってみたいなって思ってたんだが……」

「ああ、そうなんじゃないかと思いました。問題ありませんよ？」

「え？ だってさっきの話だと」

「さっきの話はさっきの話です。それにこれは第三の願いですから、拒否する選択権はこちらにあります。我々が与えるのは次元旅行をするためのパスと権利だけです。それを持っていれば次元旅行者は世界の異物として認識されなくなります。いわゆるフリーパスです。まあそついうわけですので、他に何か質問はありますか？」

「あー、いや、無いな。願ったり叶ったり、というか」

「そのための転生課ですから、転生者の方の望みを叶えるのは我らの喜びです。ついでに実績UP、報酬のボーナスも上乘せですしね。次元旅行のフリーパスを発行します！ 【受理】完了」

ぺたんと契約書に判子が押されて光が飛び散り、空中に【受理完了】と文字が浮かび上がる。

そして神様が微笑んで最後に叫んだ。

「おめでとうございます、ヤムチャさん。あなたは三つの願いを叶えさせてくださいました。さあ、最後の仕上げをいたしましょう！」

えーと…まだあるのかよ。

にこやかな転生神の頭にキラキラ星がつきささっていた。

【8】三番めの能力で次元旅行するぞ！（後書き）

転生局員もサラリーマンなんです。

神様でも・・・

次元旅行フリーパスという能力になります。

これだけならオプシヨンレベルなんです、転生者が他の世界に行くのにデメリットがあることを示すことで、デメリットがない一つの能力ということで設定しました。

転生者が力に意識を取られることが多い世界での、かなりのレア能力となります。

【9】旅立ち（前書き）

久しぶりの更新です。

ここまで合計で二万文字近く書いてます。
導入はこんなんでいいのかしらん。

【9】旅立ち

「えーと、あれなんですか？」

「船です」

それを見た時、俺が発した言葉に神様はそう答えていた。

ヤムチャが指さした先の遠くに見えるのは、何だかずいぶんと見慣れたフォルムの船、もとい宇宙船だった。

転生局の中庭に鎮座するそれは丸いデザインで、カプセルコーポレーションのものを彷彿とさせた、というよりそっくりそのままである。

「ヤムチャさんとキャロさんにはあれに乗って旅をしてもらおうと思ひましてね。用意させました」

神様は船を見ながらのんびりと構えている。

「用意つて……あれにですか？」

ヤムチャは転生界の無茶ぶりはドラゴンボール以上だと呆れてもいた。

「はい、次元間航行機能付きの宇宙も飛べるし、深海も潜れる船です。次元旅行するのも快適な動く家があったほうが便利でしょ？」

「はあ……」

俺は宇宙船、もとい次元船を見ると、キャロが一目散に好奇心丸出しで走り寄って行くのが見えた。

旅行というから、てつきりバッグ一つ、身一つ程度の気軽なスタ

イルしか思い浮かばなかったから、船まで用意するとは思って
もいなかったのだ。

「あれ、カプセルコーポレーションのによく似てる……」

「はい、デザインはあちらのものを採用しました。ヤムチャさんに
馴染みがあるものがないと思ひましてね」

「見てもいいですか？」

「もちろんですとも」

キヤロが次元船を支える足に取り付いて何故か格闘している。

金属の部分にフリードが細いプレスを吹きつけているが、傷一つ、
焼け跡一つついていなかった。

「何やってるんだキヤロ、行くぞ」

「ヤムチャさま、宇宙船ですー!!」

「そうだな、これで一緒に旅するらしいぞ」

ヤムチャの言葉にキヤロが目を輝かせる。

後ろでフリードが軽く鳴いた。

「コントローラはこれです。音声入力設定すれば声をかければ起
動しますよ」

「へえ……」

神様が丸いコントローラを操作して、次元船の入口が開いてタ
ラップが降りる。

ほぼ俺がいた世界の、地球の技術に近いものだった。
中は殺風景で何もない。

操縦桿は存在するようだが、仕切りも何も存在しなかった。

「結構広いな」

「何も無いです」

ヤムチャとキャロがひとしきり見回した後、神様が部屋の隅に端末を操作してパネルを開く。

「何をしてるんですか？」

「生活キッドです。ホイポイカプセルと同じものです」

「そんなの付いてるんですね」

興味深くヤムチャが覗き込むと、見慣れたカプセルのパネルを見つける。

【冷蔵庫】のパネルを触ると、室内のモニタリングが現れる。

「どこに設置するか自由に選べます」

「なるほどな」

部屋の片隅に設置すると、どこからともなく冷蔵庫が現れる。

「他にもいろいろあるんですね、でも参ったな」

「何でしょう？」

「俺、あまり機械に詳しくもないですよ。飛行機程度ならメンテナンスできるけど、精密機械の塊じゃないですか。修理までは手が行かないですね」

「それならご心配なく」

神様がパネルを操作して、【マシン】の項目をいじる。

『オヨビデスカ』

「うわぁ」

ヤムチャの隣に現れたのは一体の無骨な円形のロボットだった。

「機械の修理から設計まで、材料さえあれば何でも組み立てるロボットです。他にもお掃除ロボットもいますから、手間はかかりません」

「こいつに名前は？」

ヤムチャは自分の腰までしかないロボットの頭を軽く叩く。

ピピピツという電子音と共に光学センサーの赤い光が顔の辺りにちらついている。

「特にありませんね。次元船の所有者に従うようにしてありますから、ご自由に名前をつけてください」

「名前ね……」

ロボットの無機質な顔？ を眺めて俺は溜息をつく。

「キャロ、なんかいい名前ないか？」

「はえ？」

丸い窓から外を眺めていたキャロが振り返る。

お供のフリードと言えば、ロボットの出現に唸声を上げながら距離を取っていた。

「こいつに、なんか名前つけてやってくれないか？」

「名前ですかー、うーん？」

キャラが首を傾げてロボットに近づいて抱きつく。

「丸いですねー、可愛いです」

「か、かわいいのか？」

「はいっ！」

近づいていたフリードがロボットの後ろから火を吐いた。
何やってんだ……フリード。

『危険、火気厳禁!!』

途端に天井から吹き出した泡らしいものがフリードに直撃して泡だらけに変えていた。

ブルル、と顔を振って面食らったフリードが泡を床に垂らした

「とまあ安全装置としての役目も果たします」

「なるほど、名前はまあ後でいいか。よろしくな」

と、ヤムチャがロボットの頭に手を置くと、ロボットは赤い光を反射させて応えた。

まるでSF映画に出てくるロボットの相棒みたいである。

ひとしきり役に立ちそうな物を配置して、敷居も設置すると、それなりに普通の家のような快適さが保証される空間になっていた。

部屋の温度も常に快適になるように設定されているようで、キヤロとフリードは大きなクッションに身を沈めてお昼寝を開始していた。

カプセルから取り出した冷蔵庫には十分な食材が詰め込まれていて、いつでも出発できる準備は整っているようだった。

時元船は一階と二階構造で、操縦席は一階にあり、二階とは円柱棒一つで繋がっていた。

生活スペースは一階で、二階は一階よりも狭かったが、十分と言えるスペースが確保されていた。

「ここは何に使うんですか？ 窓がないが」
「修行スペースですよ」

神様がまた端末を操作する。

この重苦しい感じは知っていた。

「重力操作装置？」

「はい、今、二倍になってます。この部屋限定ですけどね」

次の瞬間、体が軽くなり、ヤムチャの体がふわふわと浮き始める。

「0Gにすることもできます。重力の最大は300倍まで、温度設定も-100度から+100度まで調節可能です。あらゆる環境に対応できるようにしてあります」

「凄いな、悟空とかベジータと同じ環境か……昔ちよつと試したけど、100倍でも辛かったんだが」

「10倍でも普通に動ける人間いませんけどね……まあ、ここはある程度の気なら弾き返す材質で作られてるので多少無茶しても平気です。無茶しすぎたら死んじゃいますけどね」

そう言つて神様は眼鏡を光らせて爽やかに笑つた。
なんかこの人のキャラが掴めないな、と思いながら、俺は浮つく
心を抑え切れない。

「そうだ、ヤムチャさん……」

真剣な面持ちになつた神様に俺は表情を引き締める。
何かあるんじゃないかという予感があった。

転生のメリットにはデメリットがあつても不思議じゃない。
むしろ破格の望みに対する何かがない方が不自然でもあるはずだ。
普通の転生者はデメリットなど知らず、転生し旅立つ。
だけど、明らかにヤムチャへの待遇はおかしい、どこか不自然だ
とヤムチャの勘は告げていた。

しかし、神様が切りだそうと口を開いた瞬間、それは起きた。

天空が赤く染まり、雷が巨大な建物に落ちた。
激しい衝撃に二人が慌てて、階下の窓辺に駆け寄ると、キャラが
頭を抱えてうずくまっている。

「おいキャラ、大丈夫か!？」

「ヤ、ヤムチャさまあ」

ヤムチャにしがみつくキャラ。

「あ、あれは!!!」

神様が叫び、キャロを置いて立ち上がると、ヤムチャは窓から外を眺めた。

紅く炎上する空に、燃え盛る建物、雷の如き光線が転生局の建物を焼き払っていく。

その天空にその光線を放つ存在が煙幕と赤い空に紛れているのがわかった。

そうしている間にも、雷光が空間を引き裂き、轟音を立てて周囲を火の海に沈めていく。

「クツ、私は行きます」

「俺も行きます！」

「いけません！！」

振り返った神様が手をかざすとヤムチャの動きが封じられる。

「何をするんです！？」

「あなた達はお行きなさい。あれは反逆した転生者です。あなたは関わってはいけない」

「し、しかし」

ピピピッ！！　　と、電子音を鳴らして円形のロボットが忙しく赤い光を点滅させて動き出した。

「緊急モード発動、時元船を出航させなさい！！」

『イエス・グランド・マスター。緊急出航』

神様の言葉を受けて、ロボットが操縦桿に無手でアクセスを開始すると、室内に光が満ち溢れる。

「私はアレを防ぎます。さらばです、ヤムチャさん。最後に転生神

冥利につきる仕事をさせてもらえました」

タラップに立ち、彼はそう告げた。
そして、外を眺めてなぜか笑った。

「それと、君の友人に感謝を」

そう呟いた神様の姿が次元船の外に消え、同時に何かが飛び込んでくる。

タラップは回収され、次元船が浮かび上がっていた。

『次元間航行開始』

ロボットのマシンボイスが室内に木霊して、次元船は次元間跳躍航行を開始する。

世界から破壊の衝撃音は消滅し、光の粒子の中に溶けこんでいた。
そして世界はゴウンという音と共に掻き消えていった。

【9】旅立ち（後書き）

ロボットはアールツデーツォーがイメージ。
名前をつけてやってくれると喜びます。

後、もう一人旅の相棒が加わります。

【10】ヤジローベ―参場

宇宙空間、その闇の海から丸い船体がつきだして、その姿が露になっっていく。

何もない空間に突如現れた熱源は、冷たい宇宙の中でただ一つの存在を誇示するように白く発光していた。

計器類異常なし、船内環境異常なし、宇宙空間待機モード移行。

先程までの超高速異空間航行から通常空間に転移して、その仕事を全うしたロボットの赤いセンサーがくるくる回って、電子音が響くと同時にお掃除ロボットが現れて散らかった室内を片付けていた。

『異常ナシ!』

と告げると、部屋の隅に移動してその稼働を一時停止モードに移行させた。

「いててて……ここはどこだ？」

ヤムチャが目を覚ますと、足元をお掃除ロボットが果敢に突撃を繰り返していた。

胸の上に小さな温かみを感じて、目を回したキャラがそこでへばっていた。

女の子特有の柔らかい感触と、お日様の匂いにするピンクの髪がピンと跳ね飛んでヤムチャの鼻をくすぐる。

「フニイ……」

「おい、キャロ起きろ」

「ヤムチャさま？」

何故か不思議そうな顔で、キャロがヤムチャの顔を見つめていた。

「どうやらついたみたいだな」

先にキャロにどいてもらい、ヤムチャも立ち上がると、平衡感覚が追いつかないのか、少しフラフラする。

船内に異常は見られないが、窓の外は夜なのか、全く外の景色が見えなかった。

「お前誰だ？」

そして部屋の隅に向かって声をかける。

そちらを見たキャロが慌ててヤムチャの背後に回って腰にしがみつく。

「だ、誰なのです」

キャロはおっかなびつくりといったように部屋の隅を眺めている。そのズタボロで大きな風呂敷はどこかで見たことがあるような気がしたが、一応警戒は解かないでいた。

でかい図体が身じろいで、頭をかいて起き上がった。

ボサボサのむさ苦しい大きな頭と、茶色い格子縞の模様の着物に一本の刀を腰に差している。

「ヤムチャ、おみやあゝ、もう耄碌したんか？ ひつどい発進でえ。」

死ぬかと思っただぎゃよ」

「ヤ、ヤジロベー。なんでお前がいるんだ」

「なんでって、おみやあ、ゲストにその態度ないべ」

埃を払ったヤジロベーがヤムチャとキャラの前に立つ。

「この娘っ子、誰じゃ？」

「ヤジロベーさん、プーアルですよ！」

「はあ？」

腕を組んでいたヤジロベーがキャラの額をデコピンする。

「キャンっ！」

額を押さえたキャラが涙目になって屈み込んだ。

「いで、何じゃこの爬虫類は？」

見ると、ヤジロベーの足をフリードがかじりついていた。
フリード、そいつは食えない、むしろお前が食われるぞ。

「フン」

フリードは首根っこを捕まえられて、ソファの置いてある方に投げ捨てられていた。

「ヤジロベーさん、ひどいですー」

キャラが慌ててフリードの元に駆け寄る。

「まあ、難しい話は抜きで、あいつがプーアルで、今はキャロなんだ。あと噛み付いたのはフリードな。どうしてヤジロベーがここに？」

「あん？ 俺も死んだんだよ」

「それはわかる」

「んでよ、転生させてやるって勧誘が来たんだよ」

「へえ」

「ってことはヤジロベーも特別な力を貰ったのだろうか？」

俺はヤジロベーの気を探る。

地球にいた頃、それほど頻繁に会ってたわけじゃないが、ピンチになると、いつもこいつがどこからか現れたっけな。

気でヤジロベーの力を探ったが、地球にいた頃とさして変わらないように思える。

「紹介入れたら特典くれるってよ、んでよ、ヤムチャの名前出しただよ」

「ああ、そうなのか？ でも、ヤジロベー、お前生き返れたんじゃないのか？」

ふと思っただ疑問を口にする。

地球で誰かが魔人ブウを倒して、ドラゴンボールでみんなを復活させた。

俺はそれをやり遂げたのは悟空だと、心のどこかで確信していた。その誘いにヤジロベーは乗らなかった。

何か目的があるのだろうか？

「けっ、冗談じゃねえ。もうあんな世界はごめんだべ。いつつもいつつ、とんでもねー連中と関わり合うバカがいると死んでも死にきれねえ。でよ、生き返るのはまっぴらって言ってやっただよ。」

次はもつと楽できる世界に行きてえからよ」

「そうか、じゃあ、ヤジロベーも転生者になるのか。厳密には俺達はちよつと違うみたいだが」

「んな小難しい話するかつ、腹減ってんだ。何か食わせろ」

ヤジロベーは勝手に冷蔵庫を開けて、中の食品を物色にかかっていた。

それを横目に俺は宇宙船の操縦器械のモニターに目をやった。

「ここは、宇宙空間なのか……」

マニュアルがあつたのでそれを手に取る。

まずモニターに手をかざす……すると画面がホログラフになりメニューコマンドが現れた。

なるほど、かなり感覚的な操作ですぐに覚えられそうだ。

現在位置は……ヤムチャがマニュアル片手に覚えている頃、ヤジロベーにキャロとフリードも交えて夕食を始めていた。

「よし、わかつたぞ!」

ヤムチャが大声を上げて振り返ると、腹を満たしたヤジロベーは安眠カプセルを取り出して寝ており、キャロはフリード相手にあやとりを見せていた。

柔らかな髪を揺らしてキャロが駆け寄ってくる。

「どうしました?」

「キャロ、今いる場所がわかった。地球と火星の中間らしい」
「火星、ですか？」

ピンと来ないのか、キャロが首を傾げる。

「ああ、このマップな、俺達の知る宇宙にかなり似てるみたいだ」
キャロのためにモニタの画面を操作して現在位置を表示する。

「ふむふむ」

「表記も火星と地球って出てるだろ」

「ああ、そうですねえ」

感心したようにキャロが熱心にホログラフを覗き込んでいる。

「ナメック星とかもあるのかな。爆発とかしてなければだけど」

神様の話では、悟空やクリリン達が乗った宇宙船とほぼ同じ性能があるらしいとは聞いた。

それならばかなり遠くの星を行き来できるはずだったが、この世界に俺達のいた世界と同じ存在がいるわけでもないなと思ひ直す。

「宇宙旅行、わくわくしますね」

「そうだな」

「ヤムチャさま、どこに行きますか？」

「宇宙旅行も悪くないが、俺は人のいる所に行きたいな。観光もしたいしな。だから最初は地球に行こうと思う」

「了解です！ 楽しみ」

弾むキャロの声、やっぱり姿形は違うけどプーアルなんだな。

「進路、地球。到着地点は……」

端末に航路を設定し、青い地球が映像として浮かび上がる。

「アメリカ、ヨーロッパ、南米……国の名前かな？ 俺達の知る地球とはだいぶ文化が違いそうだな……まあ、いいか」

俺が選んだのは大陸の端にある小さな島国、ジャパンだった。
小さな国だから、そんなに目立たないかも知れないと思ったからだ。

『航路設定完了。飛行モード移行、カウント10秒後に発進します』

「キャロ、フリード抱いてろよ」

「はい」

『カウント……8……7……6』

そしてGがかり、時元船は地球に向かって航行を開始していた。

【10】ヤジロベエ参場（後書き）

次回あれば地球編ですね。

時期は大戦前、麻帆良学園祭辺りの予定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9607v/>

【練習作】ヤムチャとキャロの魔法界転生紀行

2011年10月9日02時43分発行